No.413 2026.2.5

京機短信
KEIKI short letter

京機会（京都大学機械系同窓会）　tel. & fax. 075-383-3713
E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp
URL: https://keikikai.jp
編集責任者　京機短信編集委員会

目次

・2025年度九州支部「出前授業」後半の部ご報告……中村久志（pp. 2 – 4）
・小出楢重「池畔盛夏」について……吉村直哉（pp. 5 – 7）

小出楢重「池畔盛夏」*

* 編集委員会より：小出は 1931 年に亡くなっており、当時の著作権法（没後 30 年）に従い、作品は 1962 年以降、著作権の消滅したパブリックドメインとなっています。その後、著作権法が改正されたため、現在の保護期間は画家の没後 70 年となっていますが、既に本作の保護は満了しているため、改正による延長はありません。

小出楢重「池畔盛夏」について*

吉村直哉（S60/1985 教育学部卒）

1. はじめに

昨年（2025年）大阪中之島美術館で小出楢重の回顧展が開催されました。小出楢重は私の母校、大阪府立市岡高等学校の前身である旧制市岡中学の卒業生であることを昔から知っていましたので、私は25年前の京都国立近代美術館での展覧会にも行っています。そのとき出品されていました京都大学工学部所蔵の「池畔盛夏」が昨年の展覧会では展示されていないことに気づきました。そこでネットで検索してみますと、『京機短信』に関連記事があることが分かりました。それはこの絵を京都大学機械工学科教室が所蔵する経緯をお尋ねの内容でした（No.343**）。もう5年以上も前のことなので、既に解決済みかもしれないと思いましたが、一応貴会に問い合わせてみることにしました。そうしますと、すぐに鈴木基史先生よりお返事をいただき、絵を見る機会を与えてくださいました。その際、私が集めていました資料をご覧いただきました。

その資料を今回まとめてみましたので、この紙面をお借りしまして、ご報告いたします。

2. 「池畔盛夏」

絵は油彩の風景画で、大きさは30号位（61.6 × 97.9 cm）。絵の右下に小出楢重のサインがあるが、額の裏にも「池畔盛夏　小出楢重　一九一七年八月」の小出の直筆と思われる書が収められている。

この「池畔（ちはん）」とは池のほとりの意味で、池は奈良の荒池（あらいけ）のことだと思われる。荒池は奈良公園の東側に位置し、1888年用水池として再築

---

* 2025 年 10 月、桂キャンパスの機械系大会議室に掲示されている絵画について、吉村様から連絡をいただきました。吉村様は市岡高等学校のご出身で、小出や甲田と同窓生とのこと。私どもが知らなかった多くの情報を提供していただきました。そこで、厚かましくも京機短信への寄稿をお願いしたところ、快くお引き受けいただき、この原稿をいただくことができました。なお、吉村様からいただいた資料は、小出楢重の画集とともに、京機会の事務局に保管しています。ご興味のある方は事務局までご連絡ください。

鈴木基史（S61/1986 卒）

** https://keikikai.jp/wp-content/uploads/2020/07/tanshin_no343.pdf

されたものである。

小出には1915年から1920年まで奈良の風景を描いた作品が9点ほどある。その中で「池畔盛夏」は大きさでは最大級のものである。この絵の前には「池畔初夏」（1915年）と題する作品もある。

小出は1917年6月に結婚し、まもなく夫婦で奈良の浅茅ヶ原の料理旅館「江戸三」の亭に移り、ここで数か月滞在している。このときに「池畔盛夏」は描かれたもので、その位置関係から浅茅ヶ原から見た荒池の風景と思われる。

3. 小出楢重

小出楢重は1887年大阪市の島之内に生まれた。生家は「天水香」で知られた薬屋であった。1907年大阪府立市岡中学校を卒業すると、東京美術学校の日本画科に入学する。その後西洋画科に転科し、1914年卒業する。卒業後は帰阪し、画業に専念するが、文部省美術展覧会に続いて落選するなど、不遇の時代が続く。1919年第6回二科展で「Nの家族」が樗牛賞を受賞してはじめて世に出ることになる。その後、1931年43歳で亡くなるまでの11年余りが活躍の時期となる。この間、欧州に外遊し、大阪では信濃橋洋画研究所で後進の指導に当たるなどの活動をしている。油彩画の外に、ガラス絵、水彩画、挿絵だけでなく、随筆も手がけている。特に「裸婦の楢重」と称され、裸婦像に独自の様式を築いた。

4. 京大所蔵までの推考

小出楢重には自筆の作品控が残されており、そこには、「夏の池畔　横長30号位甲田君より京都帝大内。」とある。これにより、この絵は小出より甲田を通じて京大に渡ったことが分かる。

甲田とは甲田俊三（こうだしゅんぞう）のことで、小出と同じ市岡中学の2期生である。中学卒業後は第三高等学校から京都帝国大学工科大学機械工学科に進み、1917年に卒業している。この関係から機械工学科が所蔵するところになったと思われる。

小出楢重は、旧制市岡中学の1期生として入学しているが、2年生の時に心臓疾患が判り、2年次を休学し、卒業は2期生となっている。それで、小出の苦難の時には、1期生と2期生が集まり、絵を購入したり、お金を渡したりして小出を支援した。

1918年2期生は新たに「二生会」を結成し、事務局を小出が務めることになった。この二生会のメンバーに甲田の名がある。この年甲田は既に就職しているので、

甲田が絵を手に入れたのはこの頃かもしれない。

仮に甲田が絵を京大に寄贈したとすると、それは小出の名が世に知られるようになってからのことではないだろうか。そうすると、それは1919年の二科展入選での画壇デビュー以後となる。

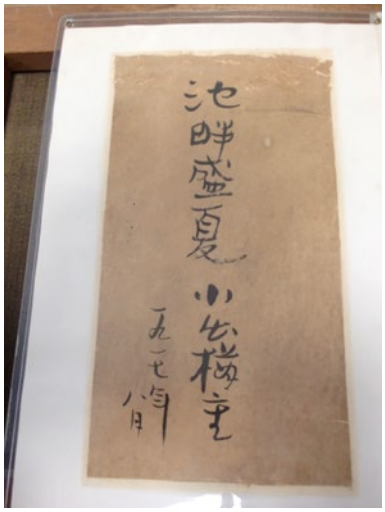
上記の小出の作品控の最後の記述は1929年の作品についてである。この作品控の作成年は不明ではあるが、遅くともこの頃までには京大の所蔵となっていたとも考えられる。

なお、甲田俊三は1917年日本兵機製造会社に就職し、その後工場長次席となり、1920年に会社が大阪機械工作所と改称すると、設計課長、研究部長等を歴任している。1935年には関西スレート株式会社を創立し、その初代社長に就任している。1943年には社長を退任しているが、この頃に亡くなったようである。

5. おわりに

絵を通じて小出と甲田の交流に思いを馳せると、市岡高校の校歌で歌われている「家族制」という言葉を思い出します。これは坪井仙次郎初代校長が創立当時から掲げたもので、一校を一家と見なし、師弟は父子、生徒は互いに兄弟とする家族のような学校が市岡の一般の評語でした。この精神が卒業生の心の中には在り続け、同窓生が小出楢重を助けることになったのではないでしょうか。

現在、絵は桂キャンパスの京都大学機械系教室の会議室に掛けられています。時には公開していただいて、より多くの人が鑑賞できる機会を設けていただければ幸いです。



額の裏に貼付されたサイン